

2018年11月30日発行

光ほしさに泣く赤子



坂内宗男

最近ある方から『季刊無教会』事務局に問合せがあり、「内村は天才である」ということについて投稿したいとのことで、責任者の私が応える仕儀と相成った。それによると、内村の天才を強調した著述が全くないので自分が記述して投稿したいとの由、結果としてテーマを立てて論考を組む季刊無教会にあってはどうか、の観点からお断わりしたのだった。

内村が稀に見るすぐれた頭脳の持ち主であることは誰しも異存ないとしても、ある面世にいう天才は奇人と紙一重といわれるはざまにあって、その奇しきタラント（天分）を神の使徒として十全に生かし、生きるとは何か、という人生の最大課題について、万人（信仰の有無問わ

ず）に生きる指針と希望を与え導いた稀に見る思想家としての根底にあるキリスト信仰に基づく深遠な魂にこそ注視すべきなのであって、私の本旨ではなかったのだ。

内村の神髄は、精神的葛藤から噴き出た良心の吐露（表題の一句）に立った生にこそあろう。あの明治期国家統合の精神的支柱たる天皇神格化の絶頂期→言論無用化の風潮にあって、個の立場を貫き、結果として不敬事件に発展、国賊として世からうとまれ、妻を失い、貧困のどん底の中で吐露した『求安録』末尾の一節なのであって（英国桂冠詩人テニソンの句）、その真実さにこそ心打たれるのである。そもそも実直→愚直な内村にとって、世渡りには不器用、不敬事件での飾らぬ対応での結末、どこの勤め先においても衝突しはじかれ、遂には教会にも落着き先なく、結果としてルターの宗教改革をより徹底した自由と独立を旨とする無教会信仰に至った人生は、神の為せる業の不可思議を痛感するのである。

内村の生の原点は、赤子の如き純粋性と罪に泣く誠実（Honesty）＝良心にあった。そこからこの世への警世（藩閥政治、足尾鉍毒事件等）、絶対非戦論の展開、また再臨運動を高唱、聖書に徹底して現実を見据える義と愛に基づく絶望ではない満腔の希望に立つキリスト信仰にて、地球→神の国の完成を希求した平凡な生き方（サタンに満ちたこの世に在っては非凡なる生とならざるを得ない）こそ高尚なる生涯と力説し、かかる人生を願った。

最後に、マルキシズムに立つ理想社会を夢見た私が、思わぬ大病→学生サナトリウムにて、塚本虎二主筆『聖書知識』に触れ絶対者の臨在を得、坂井基始良氏（その師矢内原忠雄）の聖研と人格の系譜に内村がある幸いを神の恩恵として感謝に満たされるのである。

（東中野聖書集会主宰、今井館教友会顧問）

目次

表紙・巻頭言	
目次・内村鑑三の言葉・	学校・学寮だより……………7
写真の説明・発行趣旨……………2	各地からの報告……………10
無教会全国集会2018 報告……………3	定期集会・地域別特別集会等……………12
第40回内村鑑三研究会報告……………5	事務局便り……………15
基督教独立学園とプルム学園の	「内村鑑三と北新宿展」・
卒業生交流会……………6	編集後記……………16

内村鑑三の言葉

楕円形の話

内村鑑三

真理は円形にあらず、楕円形である。(中略)すなわち、その中心は二個であって、一個にあらずと言うのである。(中略)宗教においても同じである。(中略)キリストは神であって、また人である。(中略)その実際の方面において、宗教は慈愛と審判である。愛と義である。愛のみではない、また義である。義のみではない、また愛である。(中略)そしてキリスト信者の場合において、彼は義と愛との調和を、キリストの十字架において認むるのである。

『聖書之研究』1930年1月。『内村鑑三信仰著作全集』22巻、教文館、1965年

(選：NPO 法人今井館教友会理事長 大山綱夫)

表紙の写真について

榊本様子書集「主よおはなしてください」より

榊本様子さんについては36号と37号のこの欄に書かせていただいた。“百歳の高校教師 うめ子先生”が陶板に書かれたこの文字は紙に書かれた諸々の文字よりも末永く遺ってゆくでしょう。……………

(K.N)

『今井館ニュース』発行趣旨

NPO 法人今井館教友会は、キリスト教の精神に基づいて、今井館を維持・管理・運営し、内村鑑三(無教会の提唱者)及び彼につらなる者たちの広範かつ多面的な思想と活動を自ら調査・研究するとともに、他の個人と団体による調査・研究をも奨励・支援し、それら自他の調査・研究成果の社会一般への普及に努めて、正義と隣人愛を基調とする平和的な社会の形成と発展に寄与することを目的とする(定款第3条)。その目的を達成するため、特定非営利活動に係る事業として今井館ニュース発行を通じ「内村鑑三及び彼に連なる人々の思想と活動を調査・研究・発表する事業」を行うものとする(定款第5条3項)。